



創設期の校舎—北歐風の典型的な大正建築様式のこの校舎は、

昭和19年焼失まで能代市の学芸、文化の象徴的存在であった。

第二章

昭和五年～十年

能中建設期

一、校風開拓—第一期生の卒業。

第一期生の門出、それは本当に新しいものの第一歩であった。
「願レバ大正十四年樽子山原頭ニ我が校ノ設置セラルルヤ茲ニ五
ケ年、鋭意研鑽努力ノ結果、今ヤ記念スベキ第一回卒業式ヲ挙行
サルルニ至レリ。」能中校友会誌第二号は第一期生の卒業式の状
況をこの様に伝えている。

大正十四年四月、秋田県立能代工業講習所内の一室で教科書を
めくった六四名の中学生達は、今や堂々と独立した能代中学校大
講堂（魁新聞）で、菊池知事その他多数の来賓、保護者の祝福を
うけながら実社会へと巣立っていったのである。時に昭和五年三
月四日のことである。式において、「而シ諸子ハ入学式ノトキ知
事代理ノ方ヤ来賓ノ人々カラ『諸子ハ能中ノ第一期生デアル先祖
デアルゾ、多年地方ノ熱望が具現シタ能中ノ使命ヲ考ヘ之レニ真
生命ヲ与ヘ堅実ナ学風ヲ作ッテ地方民ニ又県国ニ答フルハ任務デ

アル」トノ訓諭ヲ身ニシメテ……………猶最後ニ諸子ハ本校ノ第一期卒業生デアル諸子が在校中根底ツケタ学風ノ中ニ諸子ノ植付ケタ清イ若芽ヲ育テテ呉レルノハ第二期生以下ノ諸子ノ後輩デアルコトヲ忘レテハナラヌ。学校ノ生命ハ永遠デアル諸子ノ入学記念ニ植付ケタ記念樹が永生ノ青空目ガケテグングン延ビツツアル様ニ諸子ノ在学中ノ業績モ亦然ルコトト信ズル。」武藤健三郎初代校長は卒業生にこのように訓辞を与えた。「君達は能中の草分である。君達の一挙手一投足すべてが新興能中の校風を形づくるものである。」こう説かれて、一期生は、自らの手で校風開拓にかかったのである。

「質実剛健、馬車馬的直進精神、この様な気風が漲っていたようです。歴史も浅く、県下の古豪秋中等に較べると、わが能中は若木のようなもので、健闘を以て永遠の路を開く覚悟をしなければならなかったのです。」昭和初期に能中を果立った人達はこの様に述懐している。

因に、昭和六年頃の校友会誌より二、三の運動部のこの辺の状況を物語る報告文を抜萃、紹介してみよう。

剣道部、「我等の腕をためすべき全県下中等学校武道大会も目眉に迫っている。我等の出場の可否は未だに決しない。然し乍ら我が剣道部は、出場の可否は問題にせず只管其の精神と業とを練るに余念がない。……………五月二十五日午後二時三十分より選手推戴式が挙行された。……………能中四百の健児の肺腑より出ずる能中遠征歌と校歌を受けて推戴式は終了した。選手の心中唯勝あるのみ。」

庭球部、「先輩をしのぐ事は出来ない迄も、若く将来のある新進が控えている。人間と云う者は、苦境に立ち、そしてそれを押しきって進んで行く所にその人間の価値が光と共に生ずるものだ。我々は現在の苦境を押しきって開拓し、それを団結してゆく事に依って益々我部をして価値あらしめようじゃないか。」

野球部、「一期生時代では見受けられることの出来ない戦跡を残しているのだ。これぞ実に、我が野球部が創立僅か二年とは言い、昨年より今年と、進歩を見せた事には疑いがない。此処に我が野球部の使命があるのである。次に昨年の復讐すべき能工との戦いは来たのだ。如何なる試合に負ければとて、どうして此の試合に負けられようぞ、此の戦こそ勝たねばならぬのだ。試合間近には惜しくも破れた先輩達が、心に掛けた多大なる激励の文面が送られた。その度毎に、臥薪嘗胆せる復讐の悪鬼は胸を、腕を高鳴らせ、気魄に燃えざるを得なかった。」



創設当時の校友会誌

合に負けられようぞ、此の戦こそ勝たねばならぬのだ。試合間近には惜しくも破れた先輩達が、心に掛けた多大なる激励の文面が送られた。その度毎に、臥薪嘗胆せる復讐の悪鬼は胸を、腕を高鳴らせ、気魄に燃えざるを得なかった。」

二、至誠力行―校訓制定。

昭和五年、教育勅語渙発四十周年を迎えるにあたり、武藤校長は校訓ならびに生徒心得綱領を次のように制定した。

至誠力行

本校生徒ハ父母ノ慈愛ノモトニ光輝アル皇国ニ生ヲ受ケタル幸福ヲ稽ヘ、聖旨ヲ奉體シ至誠力行有為ナル中堅国民タルノ資質ノ練成ニ努メ以テ将来ノ大成ヲ期スベシ。

生徒心得綱領

- 一、皇室ヲ尊ビ国家ヲ愛護スベシ。
- 二、父母ニ孝養ヲ尽シ祖先ヲ崇ブベシ。
- 三、師長ニ恭順ニ兄弟朋友ニ友愛ナルベシ。
- 四、誠実ヲ本トシ礼議ヲ重ンズベシ。
- 五、国法ニ遵ヒ公益ヲ広ムベシ。
- 六、儉素ヲ尚ビ仁慈ヲ施スベシ。
- 七、身体ヲ強健ニシ智徳ヲ磨クベシ。
- 八、廉恥ヲ重ンジ自重自活ノ念ヲ養ヒ稟性ヲ高尚ニスベシ。
- 九、剛毅豁達ヲ旨トシ忍耐克己ノ習慣ヲ養フベシ。
- 十、紀律ヲ守リ忠実業ニ服スベシ。

そして、その制定の主旨を次のように語っている。「本校に於いては創立以来、主義、方針というようなことは殊更成文として

は表わさなかった。何故ならば本校の主義方針は教育勅語の御趣旨を奉体服膺するにあつたからである。而してこの心持が校旗及び校歌として現われたのであって、言わざるは言うに優るの訓を示したのである。然し歳移り、星かわれば創立時代の真精神及び伝統も誤伝せらるるの虞なきにあらずと考へたるの結果、制定することになったのである。」（校友会誌七号）、さらに、「校訓に示された事一見平凡であるかも知れぬがそれでよい。何も新奇を追う必要はない。偉い人とか清い明るい人とかいうのも平凡を積んで実行した人に外ならぬ。現代は平凡な事を確実に一歩一歩実行し得る人を要求している。至誠にして動かさるものではなく、鬼神をも感動せしむるは至誠である。諸子は再読三読此数語に含まる無限の教訓を自ら求めて力行せられればそれでよい。それで万事を解決して行く。一生の灯台となり得ると信ずる。敢て多くを言わぬ。」（校友会誌二号）と結んでいる。

かくして、大正十五年五月の校旗の樹立、同年九月の校歌の制定につづいて、能中のシルシとタマシイが出来上つたのである。

三、若き能中の意気高らか―高まる上級学校への入学率

本校を現在のように大ならしめたのは、多くの人々の努力であるが、その中でも武藤校長の寄与するところは大きであつた。

創立十周年記念式典で、創立当初の苦心を「当時能代ハ教育地トシテハ不適當ダトノ定評ノアツタ土地デ、其処ニ立ツタ能中ハ口舌ノ上デナク事実ニ於テ雄弁ニ此ノ悪評ヲ打破シテ地方ノ人々

校歌

藤村 作 作歌

- (一) そのかみ遠く數十年
盡きせぬ流れ米代の
水に皇國の新しき
若き生命を汲みてしか
若き生命を汲みてしか
若き生命を汲みてしか
- (二) み空につく日本海
沖より寄する巨濤の
巖つんざく勢に
強き力をまねびつ、
強き力をまねびつ、
強き力をまねびつ、
- (三) み國の相樽子山
かはらぬ緑松が枝に
み民我等の香はしき
清き操をたぐへつ、
清き操をたぐへつ、
清き操をたぐへつ、
- (四) 明治の帝みさとしの
みむねは深し能代潟
深きみ恵身にめて
ふる（我が友健男兒
ふる（我が友健男兒
ふる（我が友健男兒

大正15年9月制定の原校歌、作詞、藤村作博士

ニ答エネバナラヌ使命がアリ、又世ノアリフレタ中学ヨリ一頭地ヲ抜イテ中学トシテノ本質ヲ多分ニ持ツ学校タラシムル為……」
(校友会誌七号)と述べている。

生徒もなく、校舎もない中学校の校長として能代へ赴任した校長は、宿屋の一室で生徒募集に着手し、且つは開校準備を進めたと言われる。然も、地元の人々の期待に答えねばならない。その労苦は、いくら創立者の宿命とは言いがくも、並大抵のことではなかった。

校長は鋭意能中建設の基礎工事に着手し、日曜祭日といえども休むことなく出勤して只管学校経営に専心した。そして、質実剛健・至誠力行等の精神養成の主旨を掲げ、口を極めてこれを生徒に説き、自ら先頭に立って実行したといわれる。又、授業に作業科を設置し、勤労の習慣養成と、意志の鍛錬と実践力の錬磨を目的に（昭和六年、文部省令）校舎内外の清潔整頓、植樹等に当らせた。その他、七年余にわたる在任中、校旗の樹立、校歌の制定、校訓の制定（前述）等着々と能中の礎を築いていった。このような校長の苦勞に答えて、生徒、職員一丸となって、新生能中の為血みどろの奮闘をする。

「……為メ新ラシイ歴史ト精神トヨク清ク、ヨク深ク培カッテイコウト云ウ考ハ当時職員生徒ノ心二期セズシテ一致シ、心カラ心へ脈タト流レテ居ッタノデ、一同堅クスクラムヲ組ンデ荆棘ノ多イ中ニ主義目標ノ為メ血ミドロノ奮闘ヲシテ頂イタノデアリマス。」（前述の後段）そして、その結果は、上級学校の入学率を高揚させ、県下に圧倒的高率を示して若き能中の意気を高かしめ



教練及び武道稽古風景

るに至ったのである。

昭和七年九月、武藤校長に代わって玉木正行校長が赴任する。新任式の挨拶で「青年学生に求むべき事は数多くあるが、その中で大切な事の一は公明正大の精神と正義の念の養成である。」と説き、「本校はその歴史新しく、只今の在學生は本校初期の歴史を形成する人々である。一国の歴史が其の国民性の養成に重要な要素となる如く、学校の歴史、殊にその初期の歴史が、校風確立の大なる基礎となることは言うまでもない。余は、本校の生徒諸子が深く思をここに致し、明るい、強い、正しい学生としての修養に努め好模範を後進の者に示さんことを切望する。」と結んだ。（校友会誌四号）

一期生の頃、課外

①卒業生状況調 (昭和11年1月現在)

	帝国大学	高校大学予科	官立実業専門	官立専門学校	私立専門学校	陸海軍諸学校	私立大学	師範二部	実業	その他	死亡
第一回	6	11	5	2	6	1	4	16	15		4
第二回	5	6	11	1	4		1	12	25		4
第三回		4	4	1	2		2	4	41	9	2
第四回		8	7	3	6	1	2	3	26	2	1
第五回		1	5	1	4			3	25	3	
第六回		4	10		6			2	10	27	
計	11	34	42	8	28	2	9	40	144	41	11

②生徒数 (昭和11年1月現在)

	大正14年	15年	昭和2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
5年					65	64	70	79	42	59
4年				74	79	74	91	50	66	51
3年			84	84	85	108	60	74	53	82
2年		92	92	88	114	71	84	63	85	69
1年	95	98	97	130	83	87	75	96	74	89
計	95	190	274	377	426	404	380	362	321	350

③生徒出身小学校別

(昭和10年3月1日現在)

淳城第一	59	響	第二	2
淳城第二	59	粕	毛	1
尋常	71	向	能	4
榑	5	朴	瀬	2
浅	4	竹	生	2
湖	5	八	森	10
北	5	水	沢	5
口	6	水	海	10
渡	10	観	館	2
岳	2	岩	岡	2
徳	6	金	田	2
洲	2	秋	中通	2
形	2	北	鷹	6
盤	6	北	阿仁	2
谷	1	北	秋木	2
富	4	鹿	角	2
根	4	利	本	2
井	9	青	森	5
荷	8	青	森	5
上	2	その他	一名	38校
響	1			

運動の一環として始まった各運動部も、二代校長の代になると、一斉に花を咲かせ、それこそ明るく強い新興能中の名を県下にとどろかし、同窓、在校挙げて能中の発展を謳歌することになる。昭和六年から十年頃までの運動各部の成績を次にあげてみる。

バレー部

昭和四年、課外運動の一環として創始、昭和五年、全県大会に出場、七年、全県大会に初優勝、九年、二度目の優勝を飾る。

陸上競技部

昭和六年、全県大会初優勝（個人）

体操部

昭和十年、明治神宮大会に初出場し、団体六位の好成績をあげる。

剣道部

昭和八年、北日本中等学校剣道大会（旧制弘前高校主権）で三位入賞、九年、個人、団体優勝、十年、団体優勝（参加範囲は北海道、青森、秋田の一道二県であった）

その他、柔道、野球、蹴球にしても、新興能中の意気は將に巖頭虎嘯の概があったという。（校友会誌八号）

「毎夏、思われるはこれだけの河口と海とに恵まれていながらプールのない事である。『海国日本は能代から』の標語でプールを実現してもらいたい。大中では放課後又は暑休中、作業科一同頑張り二五メートルのプールを完成したのは二、三年前。本中のボート、秋工のラグビー、大中のスキー、さて、能中は……」

（昭和十年八月十八日、北羽新報）と、地元紙はこのように報じ



当時の中学生たち

ているが、課外運動の一環として発達した各運動部は、創始期の種々の苦悩を味わいながら、八、九年頃より基盤を固め、ようやく全県の覇者たるべくその鍛錬の成果を顕現して来たのである。

後に、能中の体操、柔道、バレー部の名は、全国に讃たるものになるが、この地盤は二代校長の代に培われたといつてよい。

四、ある学校生活Ⅱ軍事教練

昭和初期、日本は相次ぐ恐慌のため未曾有の不況に陥った。失業者は続出、農村では娘を売るものも出て来る程だった。やがてこの様な世相を背景に国政改革の声は高まり、皇軍の美名にかくれて軍部が台頭、政府と結託して不況打開を大陸進政政策の強行へと求めていった。昭和六年九月十八日、関東軍によって遂に満州事変が惹き起された。しかも政府の不拡大方針にもかかわらず、現地関東軍は軍事行動を全満州で行い、翌年の三月には満州国宣

言を行い既成事実を着々と積み重ねていった。こうした日本の行動には、当然のことながら国際連盟をはじめ各国の態度を急激に硬化させ、八年の二月には我國の国際連盟からの脱退という最悪の事態まで発展し、我が国は国際的孤立に陥ることになったのである。本校が、前述の様にようやくその地堡を固めつつある時は丁度この様な時期にあたり、軍国主義の黒い影が教育の世界に徐々に押し寄せる時でもあった。そこで、ここでは、昭和初期の軍事教練の模様を当時の記録から偲ぶことにする。

軍事教練は、大正十四年四月、政府が軍隊における予備軍拡大の施策を推進するため、全国の官公私立中学校に軍事教育を実施することに決定し、陸軍の現役將校を各校に配属したことに起因する。本校では、早くも大正期に配属され、初代配属將校は偵騎兵大尉だったという。(校友会誌七号)

黒溝台記念演習記事。

一月二十八日、第八師団の日露戦役黒溝台会戦記念日当日、我が校に於いて例年の如く能代工業学校と連合して藤山付近に於て対抗の記念野外演習を実施し、演習終了後長嶺陸軍少将の「帝國の軍備と我等の覚悟」なる演題の下に軍事講話を施行し、二十六年前、我等が先輩たる第八師団下の健児の勇戦苦闘を偲び併せて能中健児の意気を発揚せり。左に演習経過の概要を述べんとす。

第一編成

三箇中隊編成の一箇大隊教官之を指揮し第一第二中隊は第四、三学年を以て、第三中隊は第一学年を以て編成し、(略)

第二 集合

午前七時五十分体操場北側校舎に縦隊横隊に集合し、雲降りしきる中を隊伍堂堂演習開始地たる機織西端三叉路に向い、午前八時二十分出発午前九時十分、所命の地に集合終る。

第三、演習経過(一部抜萃)

午前十時二十分目視に依り我が先遣小隊は藤山南端を占領せるを知る。次で、我斥候の報告に依り近づく敵の後統部隊藤山に進出すべきを知り、直ちに之を撃滅するに決し、第一・第二中隊を第一線、第三中隊を第二線とし藤山に向い前進す。前進する事三百米藤山方向を見れば、我が先遣小隊は敵の藤山に在る先遣部隊を攻撃中にて銃声熾なるに、藤山北方には敵の後統部隊展開前進中なるを目撃す。(略)

(校友会誌二号)

五、躍進する能中 十周年記念式 行さる

十月五日、今日こそ我が能代中学校創立十周年記念式典の挙行せら



教練手帳と教練合格検定合格証

れる佳辰である。常には男世帯の殺風景な校舎も今日は造花に、五色のテープに、種々化粧を凝らし、万国旗は張り巡らされ、全校歡喜の坩堝に包まれ、到る処笑顔の群で埋められている。一方正門の緑門を入れば、右手の松林を凌駕すること層一層、十周年記念事業の一として造られた国旗掲揚塔には大国旗が、今日の盛典を寿ぐ如く、夜来の雨も名残りなく晴れた碧空に高く、朝風を受けてひんぱんと翻り、四囲の青松も一入緑を添えて鮮かに、瑞気は校舎の内外に充ち満ちていた。

午前七時を過ぐる頃から盛装に足どりも軽き来賓陸續と殺到し、定刻前迄には、無慮四百を算し、受付の前は人垣が築かれ何時果つるかと思はれる位であった。控室からは歓談する声がなごやかに洩れて来る。

十時を過ぐる二十分、予鈴の音朗かに鳴り渡れば生徒、同窓生父兄、来賓の順に入場、さしも広き講堂も人波に埋れて立錫の余地も無い程でした。唯々人々の面上は歡喜に燃え、静粛に挙式を待つのみであった。」(校友会誌七号)

十時四十分、生徒三十三名、職員二十五名、同窓生七十三名、父兄二五〇名、来賓(知事代理神代学務課長、杉本代議士、児玉県議、武藤、玉木前校長、県内各中学校長、小学校長、小林能代港町長その他沢山の町議員)、特別功労者として今立前町長等一四〇名計約八百数十名の参列のもと、壮嚴なる式典が開始された。

県知事代理による告辞に続いて数多の来賓各位より祝辞を賜わったが、中でも、武藤初代校長の開校当時の追憶を漲らせながら幾分興奮した面持で創業時代における苦心努力を述べた時には、

参列者一同、万感胸に迫り、目頭が熱くなるのを覚えた程であった。「本日、創立十周年祝典ヲ迎ヘラレマシタガ、創立当時ノ意氣ノ衰エヌ限り、真ノ能中精神ノ光ツテ居ル限り本校ハ日本ノ中学トシテ天下ニ名ヲナスコトハ敢テ難クナイト信ジマス。」祝辞の中のこの言葉は、いかに在校生の心を奮い立たせたことか。やがて二年後(十二年十月)の体操部の神宮大会優勝という快挙になって現実のものとなって来る。又、玉木前校長(在職二年三ヶ月)の「三十年ノ歳月ハ他ノ歴史アル学校ニ比スレバ其ノ期間モ短カク、マタ三百余ノ卒業生、四百ニ充タヌ在校生ハ、其ノ数ニ於テ決シテ多キヲ誇ルベキデアリマセンガ、当地方ノ優秀ナル青少年デアリマスカラ、今後十年、二十年ヲ経過スレバ、コレ等ノ間カラ多数ノ人材ガ世ニ現ハルルノハ明カデアリマス。……………」本日の祝典ヲ契機トシテ更ニ奮勵努力母校ノ名誉ヲ発揚セラレンコトヲ切望致シマス。」との勵しの言葉も、生徒の心を奮い立てて、能中健児の誇りと歴史を不動のものとすべく決意させたのである。

式典は午前中に滞りなく終え、午後からは盛大な祝賀会が開かれた。翌六日は、能工、大中、鷹巣、本校の野球大会と、鷹巣、土商、金農、本校との武道大会が行なわれ、柔道は優勝、剣道は準優勝、野球は大中に敗れはしたもの、一対一の延長の大接戦となり、共に新興能中の意気を吐いて、能中の躍進を示し、市民をよろこばせた。又、式典当日より続いた展覧会、即売会はこの日もひき続き行なわれ、入場者三五〇〇余りという盛況であつたといわれている。(校友会誌七号)

かくして、能中は幼年期を終え、真の活動期たる青年期へと歴史の歩みを進めることになる。

参考までに、式典に至る経過を地元紙北羽新報と学校の記録から付記しておく。

大正十三年

十二月廿三日 秋田県立能代中学校設立許可セラル。

大正十四年

二月二日 第一回生徒募集発表

二月十九日 秋田県師範学校教諭武藤健三郎本校校長ニ補セラル。

四月六日 第一回入学式ヲ举行ス。

四月十六日 本校体操場建築ニ着手ス。

九月八日 教育勅語、成申詔書ノ謄本ヲ下賜セラル。

九月十日 本校舎建築ニ着手ス。

十一月十一日 新校舎体操場ニ移転ス。

大正十五年

五月六日 校旗樹立式ヲ举行ス。

五月十三日 新築本校舎ニ移転ス。

八月廿一日 校舎新築落成ス。

九月十六日 校歌ヲ制定ス。

九月廿三日 校舎新築落成祝典ヲ举行ス。

昭和二年

二月七日 先帝陛下御大葬還拜式ヲ举行ス。

昭和三年

四月一日 本年度ヨリ学級増加トナリ定学級十五学級トナル。(このことに関し、十周年記念の際、

小林能代港町町長が、「近年入学者が漸減し、百人にも満たない状態にある。これは本町民の教育に対する無関心か、向学心の劣れる為か、いずれにせよ寒心すべき事である。学校当局もこの点に留意して欲しい」と述べている。校友会誌七号)

十月四日 天皇・皇后両陛下ノ御真影ヲ下賜セラル。

昭和四年

九月廿五日 本年ヨリ物故職員生徒ノ追悼会ヲ行フ。

昭和五年

三月四日 第一回卒業式ヲ举行ス。

三月五日 同窓会発会式ヲ挙ゲ。

八月廿四日 第一回同窓会ヲ開催ス。

十月六日 田中文字部大臣来校生徒ニ対シ訓辞セラル。

十月卅日 教育勅語渙発四十周年記念式ヲ举行。終ッテ報告祭及ビ旗行列ニ参列ス。

十一月三日 明治節拝賀式ヲ举行ス。終ッテ記念植樹ヲナス。今朝柳町新道ノ出火ニ本校寄宿舎類焼ス。

昭和六年

四月十四日 御真影奉還式ヲ举行ス。

四月十八日 御真影奉還式ヲ举行ス。

昭和七年

二月十一日 紀元節拝賀式举行。終ッテ建国際举行ニツキ

全校生徒日吉・八幡両社ニ参拝。

四月廿四日 軍人ニ賜リタル勅諭滿五十周年記念祝典ニ当
レルヲ以テ在郷軍人分会主催ノ旗行列ニ参加
ス。

八月十六日 武部本県知事來校セラル。

九月五日 武藤校長ノ告別式ヲ挙行ス。

九月八日 玉木校長ノ新任式ヲ挙行ス。

昭和八年。

十二月廿三日 親王殿下御降誕遊バサレシニヨリ学校長ノ奉

祝謹話アリ。

十二月廿九日 親王殿下御降誕奉祝旗行列ニ参加ス。

昭和九年

六月五日 故東郷元師国葬日ニツキ学校長ヨリ訓話アリ。

七月四日 玉木校長ノ告別式ヲ挙行ス。

七月九日 小松校長ノ新任式ヲ挙行ス。

昭和十年

六月一日 十周年記念式ノ大綱定マル。予算二千六百余
円ナリ。

九月十四日 全県男子中等学校陸上競技大会及ビ体操競技

大会ヲ本校ニ於テ開催スル。

九月廿三日 八月廿六日十周年記念事業国旗掲揚塔竣成セ

シニヨリ本日第一回国旗掲揚式ヲ挙行ス。

九月廿六日 午後一時ヨリ市内西福寺ニテ十周年記念追悼

会ヲ行フ。

十月五日 午前十時半ヨリ本校創立十周年記念式典ヲ挙
行ス。



奉安殿一樽子山の校門を
入るとすぐ左側の並木の
奥一図書館の附近に建
てられてあった。